

平成 25 年 度 学 校 評 価 書

学校名	兵庫教育大学附属幼稚園
-----	-------------

1 学校教育目標

心身ともにたくましい子どもの育成	○ 健康な体の子ども	○ よく考えて最後までやりぬく子ども	○ やさしく豊かな心をもつ子ども
------------------	------------	--------------------	------------------

2 本年度の重点目標

(1) 園運営	<ul style="list-style-type: none"> • 園運営が主体的かつ円滑にできるよう、園長のリーダーシップのもと、教員一人一人が明確な目的をもって力を合わせて取り組むよう努める。 • 幼児一人一人の特性に応じた適切な指導ができるように、キンダーガーデンカウンセラーのアドバイスも参考に教員間で情報を共有し指導にあたる。 • 「うれしのタイム」における幼児の育ちに着目し、人のかかわりに視点をあて、研究テーマ「子どもにとって意味ある環境を考える」に迫る。 • 保護者の保育力を高める「親育てプログラム」を実施し、より効果的な子育て支援事業を推進する。 • 大学との連携では、大学教員を招聘しての研究活動や親子活動、保育活動を計画的に推進し、日々の保育へつなげるよう努める。
(2) 教育研究活動	
(3) 他校種との連携	

3 自己評価結果（達成状況）【A：達成している B：概ね達成している C：あまり達成していない D：達成していない】

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
園運営	○組織運営 • 教員一人一人の主体的な取り組みを促すよう、園長がリーダーシップを発揮し、大学と一体となった園運営を行う。	<ul style="list-style-type: none"> • 園務がスムーズに遂行されているかを教員会議や日々の保育情報交換の場において点検するとともに、附属学校運営委員会での審議をふまえながら、園長のリーダーシップのもと、大学と一体となった園運営を行った。 • 各教員が自己目標を定め、常に意識して園運営、学級運営に主体的に取り組めるよう、必要に応じて管理職が個別の面談や指導助言を行った。 • 年度末実施の保護者による「幼稚園教育アンケート」からも、本園の教育や運営に対して、肯定的な評価が得られていた。 	B	<ul style="list-style-type: none"> • 今後も園長のリーダーシップのもと、教員会議や保育情報交換会、園内研修等を通して、幼稚園全体で保育の質の高まりや、ともに学び高め合う教師集団を目指し取り組んでいきたい。 • 各自の視野や保育の資質を高めるため、積極的に近隣の幼稚園や保育園等への参観を促したい。
	○学年、学級経営 • 目指す各学年や学級の姿に向け、ねらいを明確にし、計画的な環境構成を行う。	<ul style="list-style-type: none"> • 年度当初に、学年経営及び学級経営の方向性や課題を明らかにし、今年度の保育の方針を立てた。学期ごとに振り返り、達成状況や課題をまとめ、教員会議で方向性を確認しながら保育に取り組んだ。 • 学期ごとの学年・学級経営や、各行事ごとの振り返りなどの反省や評価を、会議等で検討し、教員相互で保育の質を高める努力をした。 • 各週末に学年担当副担任も共に学年打ち合わせの時間をもち、保育を振り返り、次週の保育の方向性を確認した。 • 朝の打ち合わせ時には、引き続き各担任より本日の保育のねらい及び課題を明確にし、学年担当副担任や他学年の教員とも共通理解を図り、保育を行うとともに日々の振り返りを翌日に活かした。 	B	<ul style="list-style-type: none"> • 教員相互に保育の質を高めていけるよう、互いの保育を見合う園内研を計画的に設け、大学教員にも積極的に働きかけ、他者評価を含め、保育の振り返りを積極的に行う。
	○説明責任 • 日々の保育については降園時の説明及び「学級、学年通信」等で報告し理解を求め、各行事については、取り組みのねらいを明確に知らせ、あわせて事後のアンケートの結果を参考にその成果及び課題を「ふよっこだより」等で公表する。	<ul style="list-style-type: none"> • 「ふよっこだより」を年 23 回発行し、教育方針や園で行われる保育の内容、各行事の主旨・取り組み等を伝え、園の保育や幼児の育ちに保護者の理解が得られるようにした。 • 主な行事ごとに保護者にアンケートを依頼し、保護者の意見や要望をふまえ、行事の成果や課題等を「ふよっこだより」で伝えた。 • 「学年・学級通信」を随時発行し、幼児の遊びや生活の様子を通して、保育のねらい等を伝えてきた。 • 降園時に、各担任から学級の保護者に対して、その日の幼児の姿をもとに、保育のねらいや幼児の育ちを伝える機会をもった。保護者に引き渡す際には、個別にその日の様子を伝えた。 • 園の教育を理解してもらうため、全学年の保育参観及び保育参加日を（「ふよっこデー」）を年 9 回実施し、保育を見る観点と事前に伝えたり、当日その場で機会を見つけて保護者に説明をし、理解を得るよう努めた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> • 教育課程に基づく園の教育方針については、園の保育や幼児の姿を通して保護者に十分な理解が得られるように、様々な場面を利用して年間を通して説明していく。 • 園内の行事を中心とした保育の様子を写真を交えてHPに掲載し、公開し始めているので、今後も定期的に情報を発信していきたい。
	○危機管理体制の整備及び施設の拡充 • 「附属学校園における安全確保及び安全管理の手引き」に基づき、毎月実施の「子ども安全の日」における安全教育への意識付け(避難訓練等)及び施設設備の定期点検とその改善・拡充に取り組む。	<ul style="list-style-type: none"> • 「附属学校園における安全確保及び安全の手引き」を職員に配付し、周知徹底するとともに、避難訓練毎に詳細な計画書を作成し取組んだ。 • 毎月 1 回の「子ども安全の日」には、全園児や学年に応じた避難訓練や安全指導を行った。遊具や施設の安全点検は、2か月に 1 回（急を要する場合は随時）行い、事務室に修理を依頼し、速やかな改善を行った。 • 避難訓練は、不審者対応、火災、地震を想定し、各学年や幼児の発達に応じた安全指導の方法や内容を検討し、より細やかな指導ができた。さらには、定期的に避難訓練を位置づけることにより、教師の臨機応変な対応を促すことにつながった。引き渡し訓練や小学校と合同の不審者対応訓練も 1 回ずつ行った。 • 各教員が幼児の怪我や疾病等緊急時の初期対応を適切にできるよう研修したり、心肺蘇生法を消防署員を招いて実地訓練を行ったりした。 • 万が一の火災に対応できるように、消火器の設置場所を見直した。 	A	<ul style="list-style-type: none"> • 避難訓練は、教員が迅速かつ臨機応変に対応することが課題であり、今後も教員の危機管理意識や対応能力の向上のために継続していく必要がある。そのためにも、毎回様々なケースを想定しての避難訓練を継続したい。

4 分野・領域ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
<ul style="list-style-type: none"> ◇園運営については、いずれの評価項目においても、自己評価以上のことが実施できている。 • 今後も引き続き園長がリーダーシップをとり園経営が充実するよう期待している。 • 引き続き互いの保育を見合う園内研の回を重ね、日々の振り返りを継続して行いながら保育の質の向上に努めてほしい。 • 附属幼稚園の教育方針については、引き続き、「ふよっこだより」や HP で発信したり、会を捉えての園長、副園長からの話を継続してほしい。 • 毎月「子ども安全の日」を設定し、様々な事態を想定して避難訓練を実施していることは高く評価できる。今後、職員が臨機応変に対応できるように抜き打ちで行うことも計画してはどうか。

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
教育研究活動	<p>○教育活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 本園の特色ある取り組みである「うれしのタイム」のねらいを明確にし、人とのかかわりに視点をあて、子どもにとって意味ある環境を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 三年間の教育課程をもつ幼稚園として、教育課程を見直しながら三年間の幼児の育ちを見通した保育が行えるよう、各教員間の保育観や子ども観の共有に向けて学期毎に点検を行った。 園行事においては、担当者の計画のもと、行事の主旨やねらい、取り組みの方向について共通理解し、さらに行事後は振り返りを行い、幼児の育ちにつながる行事の在り方を検討してきた。 本園の「うれしのタイム」の伝統や意義をふまえ、幼児の育ちを支える「うれしのタイム」の在り方と、学年学級の活動や行事等との関連について意識しながら取り組めるよう、機会を捉えて教員で話し合う機会を設けた。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 異年齢交流の場である「うれしのタイム」の活動については、一人一人の幼児にとって二年ないし三年間という期間の中でその子の育ちを見通した保育が行われているのかを機会を捉えて点検していきたい。 	<p>◇教育研究活動についての自己評価は妥当であり、改善の方策も適切である。</p> <ul style="list-style-type: none"> 異年齢交流の場である「うれしのタイム」の中で3、4、5歳児の発達の様子は設計上の問題があり、死角が多い。そこに環境構成上の工夫の余地があるのではないか。
	<p>○幼児理解</p> <ul style="list-style-type: none"> 幼児一人一人の特性に応じた指導ができるよう教員同士及びカウンセラーによるアドバイス等を日々の保育情報交換や教員会議等で共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> キンダーガーデン・カウンセラーに、各クラス学期に1～2回観察してもらい、個々の幼児に応じた指導方法のアドバイスを受たり、保護者の相談へとつないだりすることで、より個の特性に応じた指導が行えるように努めた。カウンセラーからのアドバイスは、全教員が情報を共有することで一貫した教育が行えるようにした。個別の支援計画は、定期的に見直し、次年度に引き継げるようにした。 就学に向けて、6月と9月に希望進学先調査を行い、必要に応じて各小学校と連絡を取り合い、日常の幼児の様子を見てもらう機会を設け、進学先のスムーズな決定と進学後の適切な受け入れ準備を図った。また保護者からの進学相談には、担任、副園長があたり、必要に応じて就学予定校や教育委員会と連絡を取り合った。 今年度より、文部科学省のインクルーシブ教育構築システム事業の委託を受け、特定の幼児に限定し、合理的配慮の視点からの観察記録を行い、担任と協力員、カウンセラーが協力しながらその子にとってのよりよい支援の方策を探っていった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 特別支援コーディネーターを中心に、インクルーシブ教育についての見識を高め、より効果的な支援が行えるように研鑽を積みたい。 	<ul style="list-style-type: none"> キンダーガーデン・カウンセラーのカウンセリングは、保護者にとって参考になる部分がある。今後も有効活用してほしい。また、インクルーシブ教育については、今年度からの実施なのでより効果があるよう研究を積み重ねてほしい。
	<p>○研究活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 保育場面において人とのかかわりに焦点をあて指導していく中で、国立教育政策所教育課程研究指定校事業課題である「協同性を育て道徳性・規範意識の芽生えを培う指導の在り方」を探る。 	<ul style="list-style-type: none"> 国立教育政策所教育課程研究指定校事業課題である「協同性を育て道徳性・規範意識の芽生えを培う指導の在り方」より、本園の研究テーマを「子どもにとって意味ある環境とは一人とのかかわりに視点をあてて」とし、関連させながら研究の方向性を探り、先行研究や事例収集を行いながら進めていった。 事例を分析する中で、道徳性や規範意識の芽生えに必要と考えた経験を出し合い、整理していった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 研究については、見通しをもった計画を行い次年度は大学の幼年教育コースの先生方にも共同研究の形で参加を依頼し、研究の中身を深めていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 研究については、「道徳性や規範性の意識の芽生えに必要と考えた経験を出し合い、整理する」ことについて、次年度に向けより深めていただきたい。
	<p>○子育て支援事業の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> 保護者の保育力を高める「親育てプログラム」を実施し、より効果的な子育て支援事業を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「親育てプログラム」として「子育てひろば」「誕生会」「親子活動」「にこにこ子育て講座」を実施し、それらの活動を通じた保育参加、保育参観を行った。 「子育てひろば」へ保護者が参加しやすいように、今年度も午前保育日に設定した。また、保護者への負担が少なくかつ積極的な参加を促進するように、事前に具体的な活動内容や幼児へのかかわり方等について情報を発信したり、実施後は、参加保護者に参加しての感想や気づきを書いてもらったものを、情報誌「だあいすぎ」に掲載し、反映させた。 「ふよっこデー」（保育参加や保育参観）では、各学年の保育参加や、親子活動の機会を設け、親子が触れ合ったり共に活動したりする場とした。また、月ごとの「誕生会」では、園長・副園長を交えた懇話会を、数回に分けての「弁当参加」では、担任と話す場を設け、子育てを考える機会であるとともに、限定された人数での参観日とし、ゆったり参観できるようにしており、保護者にも好評である。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 「子育てひろば」では、保護者が参加しやすいように、負担の軽減を考慮するとともに、参加することで得ることについても啓発していきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 「子育てひろば」のスタッフとして保護者が参加しやすいように工夫している。次年度に向けてなお充実するように期待している。
地域への貢献	<p>○開かれた幼稚園づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域の未就園児親子参加の「子育てひろば」を年10回実施し、地域、幼稚園、家庭がともに育つ活動を展開する。 	<ul style="list-style-type: none"> 未就園児親子参加の「子育てひろば」を、年10回実施したところ、年間の登録者数は98組であった。前半は「うれしのタイム（在園児や「きっずくらぶ」の保護者が遊んでいる場）」に参加、後半は遊戯室で各クラス単位で在園児や保護者と共に活動する日と、園長による「子育てワンポイント講座」、副園長による「触れ合い遊び」を行う日を設けた。今年度の新しい試みとして、大学の授業とリンクして、大学院生が企画参加しての「触れ合い遊び」を行った。 幼稚園のホームページに、行事を中心とした保育の様子を定期的に掲載し、地域に向けての情報を発信した。 「子育てひろば」に参加している保護者も気軽に子育てや就園の相談ができるよう、園長、副園長が積極的にかかわるようにした（すこやか子育て相談）。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 引き続き幼稚園のホームページに、幼稚園の遊びの様子を紹介し、地域に向けて情報を公開していきたい。 計画的に大学院生の参加を授業と結びつけ、活動内容の幅を広げ魅力ある活動にしていきたい。 	<p>◇地域への貢献についての自己評価は妥当であり、改善の方策も適切である。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「子育てひろば」では、園長、副園長による子育てワンポイント講座や触れ合い遊びなど計画的に行われている。大学院生の企画についても継続してほしい。これらの活動をHPを活用し広めていってほしい。

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
地域への貢献	<ul style="list-style-type: none"> ○研究発表や公開保育 ・年3回の幼年教育研究会を通して、研究の成果を発表し、地域及び社会に貢献する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼年教育研究会は、県内外の国公私立幼稚園・保育所教員、大学教員、大学院生等約50名の参加者を会員として年3回行った。延べ230名の参加者を迎えた。 ・第1回（5/29水）と第3回（12/7土）は、公開保育、研究報告、分科会総括を行った。第2回（8/1木）は、大学の講義室に場所を変え、年齢毎の分科会に大学教員も加わってもらい、研究テーマに焦点を絞り話し合いを深めることができた。 ・国立教育政策所教育課程研究指定校事業を受託しており、文部科学省初等中等教育局幼児教育課教科調査官津金美智子氏には、事前指導（11/6水）で、保育視察と研究経過の指導を受け、さらには本園の公開研究会において講演を受ける機会を得、研究の方向性を導いていただくことができた。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き年に1回は土曜日（または日曜、祝日）開催とし、地域及び社会に貢献していく機会としたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・研究については大学教員も加わり、深みのある研究を続けてほしい。土曜日開催を年1回実施しており、幼稚園や保育所の教員など、保育を見たい人に貢献している。今後さらに土曜開催が増えるとういのは。
他校種（小・中・高校・大学）との連携	<ul style="list-style-type: none"> ○校種間連携 ・近隣の高校も含めた他校種との交流は、ねらいを再認識し、活動を見直す中で互恵性のある連携活動を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・三附属連携推進協議会において、各校種間で連携の重要性を確認し合い、計画的に交流を進めた。第3回目には、各学校の研究の取り組みを報告し合い、教育観を共有し合う機会となった。 ・附属小学校との交流では、5歳児が5年生と11月に、1年生と3月に交流給食を実施した。5歳児の「わくわくキャンプ」では、小学校の教員と共にカレーを食べたり、スタンプを披露してもらうなど、園児との積極的な交流を行った。 ・附属中学校との交流では、4・5歳児と3年生間で、7月に中学生とペアの幼児が遊び、9月には中学生がペアの園児に手作りの玩具を持参し一緒に遊んだ。5歳児は同じペアの生徒と共に「おやじの会」の方が中学校の畑に植えたさつま芋を掘る活動も経験した。 ・県立社高等学校1年生が「触れ合い育児体験」として、学年毎に一緒に遊んだり弁当を食べたり、体育科生徒の集団行動を見たりした。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も互恵性のある連携・交流となるように事前の打ち合せ・事後の反省会を行い、より連携活動の質を高めていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇他校種との交流についての自己評価は妥当であり、改善の方策も適切である。 ・他校種との連携については、社高校体育科生徒による「集団行動」見学なども含め様々な形で行われ定着している。今後もなお一層深まりのある連携をしてほしい。 ・学生のオリエンテーションを早めに実施することは、幼児にとっても学生にとってもよいことである。このまま継続してほしい。 ・大学と連携することは、他園ではないものである。本物に触れること、保育の環境を変えることは幼児にとってもよい経験である。今後も積極的に取り組んでほしい。
	<ul style="list-style-type: none"> ○実地教育(教育実習) ・改訂されたテキストを生かし、初等基礎実習が効果的な実習となるよう努める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・初等基礎実習においては、昨年度に引き続き事前に学生が機会を見つけ園に足を運び、園や幼児とかわり課題意識をもって実習に臨めるように、オリエンテーションを4月と実習が始まる直前の2回行った。 ・実習前にテキストをオリエンテーション時に熟読するように促しておき、それを基本に指導講話の内容を具現化させた。 ・昨年度に引き続き、教材研究、保育研究、幼児理解等の時間を確保できるように、指導案作成はパソコンを使用できるように環境を整えた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・学生が実習前に幼稚園で幼児とかわるチャンスができ、本実習へのスムーズなスタートがきれるように、引き続き幼稚園でのオリエンテーションを早目に実施する。 	
	<ul style="list-style-type: none"> ○大学との連携 ・大学教員を招聘しての年2回の親子活動や年4～6回の保育活動を推進したり、園内研修会に参加、助言を求めたりするなど大学との連携を密にした取り組みを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・3・4歳児の親子活動（年1回）、4・5歳児の陶芸活動（4歳児2回、5歳児1回）を大学教員指導のもと実施した。親子活動は、それぞれの年齢や発達に合った内容で、親子の触れ合いの機会となった。陶芸活動は、ここ数年大学キャンパスでの活動が継続されており、本格的な陶芸体験ができた。また、大学キャンパスでの活動が有意義な経験となるよう、自然豊かな大学構内散策や学食で食をとる機会も設けた。 ・PTA との共催で年3回実施した「にこにこ子育て講座」では、大学教員による講義やクラリネット演奏を聴く機会を得た。 ・大学幼年教育コース教員には、幼年教育研究会のコーディネーターや指導助言者として参加を得た。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・大学教員には本園の保育の資質向上や研究推進のために、定期的な「保育を見合う会」や園内研究会への積極的な参加を依頼し、指導助言を求めため、年度当初から計画的に依頼していきたい。 	